

風と共にふかれて

neziro

風説・創世記

第一章

1光と闇の粒子が漂い混ざりあった空間がそこにあった。

2それらは渦を巻きながら溶け合っていて、3その流れに時が生まれた。

4後に流れは加速し、風が生まれた。

5風が吹き抜けると、光がひとところに集まり上を作り、闇もまたひとところに集まり下を作った。

6だが、狭間に光と闇が残された場所ができた。

7残された光と残された闇は次の風によって闇の上に膜を張った。

8再び残された光と再び残された闇は膜の上を滑っていた。

9次の風で再び残された光と闇も別れ始めた。

10それから風が吹き抜けなくなった。

11光と闇は別れる途中で固まってしまい、12光の多い闇は水に、闇の多い光は陸地になった。

13上の光は更に小さく固まって輝きを作り、残りは空となった。

14下の闇も更に小さくなり岩となり、残りは海となった。

15一日目である。

16しばらくして再び風が帰ってくると、17輝きが流れるようになった。

18輝きが流れ、昼と夜が生まれた。

19輝きが流れると陸地が空に吸い上げられ、輝きが戻ると陸地が闇に押し付けられた。

20再び風が吹くと、陸地の一部が光と闇に別れ光の多い陸地は植物となり、闇の多い陸地は動物となった。

21それらはまだただの塊であった。

22二日目である。

23夜明けと共に再び風が吹いた。

24植物はさざ波を立て、植物は動物の塊を風に揺られながら撫でた。

25しばらくして動物のひとつが自身を知った。自身の体を知り、自身が人である事を知った。

26人はイレス、女であった。

27イレスは目の動物を見て、自身を知ることを待った。

28動物はまもなく自身を知り、自身が狼であることを知った。

29狼はスザル、男であった。

30風が吹き、イレスは子を宿した。

31三日目である。

32そうして世界は形作られ、イレスは母となり三人の子の母となった。

33人と狼とハイブリッドである。

34人はテルムと名付けられ、狼はハラドマネと名付けられ、ハイブリッドはアクタハラスと名付けられた。

35テルムはアクタハラスとの間にクマネとラセエドとレコファを儲け、36クマネは人、ラセエドは狼、レコファはハイブリッドであった。

37ハラドマネはラセエドとの間にテレコとノクシャとラスカルとフィークとデヒリムセンドとホタを儲け、38テレコは狼、ノクシャはハイブリッド、ラスカルはハイブリッド、フィークは人、デヒリムセンドは人、ホタは狼であった。

39クマネはフィークとの間にイエプンとスラメドラクを、

40デヒリムセンドはスラメドラクとの間にヘリスとヘムジュとトラスカを儲けた。

41レコファはラスカルとの間にフィリカとネフロンチとシェバネフトフを、

42ノクシャはシェバネフトフとの間にクロフトフとシャレスカとポトとフリオシャコを儲けた。

43テレコはホタとの間にクルスとファミラとシリスとトジョスとブコレウスを儲けた。

44こうして二つの種は三つの種に別れ、三つの種族になった。

第二章

1フィリカはポトとの間にフカとメトゾとスメルとピリカを儲け、

2スメルはフカとの間にフルエステルとアクタトロスを儲け、

3アクタトロスはピリカとの間にシュタスとメロニエルとクザトメリオトとロワイネルを儲けた。

4シュタスは風によってアクタラスカを儲けた。

5アクタラスカはハイブリッドの子ではなく風の子であり、生より授かった性を持っていなかった。

6各々の種族はそれぞれに繁栄を遂げ、7互いの領域を巡って紛争が生まれ各種族に多くの死が訪れた。

8アクタラスカは人、ハイブリッド、狼に言った。9「紛争により生に死が訪れることはあってはならない。

10生に死が訪れぬよう、私の一部を天と地の一部とし各々の生命に与える。11これによって、生に死が訪れなくなるであろう。

12そして、人には知を、ハイブリッドには力を、狼には永遠を与え、

13私は風の木となり身を分かち、スフィアをヘミスフィアとセミスフィアに分けヘミスフィアを人に、セミスフィアをハイブリッドに与える。」

14それによって全ての紛争がなくなり、狼はヘミスフィアとセミスフィアへ自由に渡った。

15そうして、世界は二つに分かれた。

16アクタラスカの一部は照業へと姿を変え、生者の生命を奪い魂を永遠に死ぬことのないようにした。

17よって照業を持つものは死を失った。

ヘミスフィア年表

ヘミスフィア風塵・年表

風塵1年　　ヘミスフィア政府の発足。

風塵10年　人口の増加により、人の数が照葉の数を上回る。

風塵11年　照葉を持つ人を始代祖と呼び差別化。

風塵13年　食料の需要が供給を大きく上回り、食糧難が起こる。

風塵14年　風の照葉を使った食料供給システムが考案されるが、風の始代祖はそれを拒否。

風塵17年　風の始代祖の拘束。実験を重ねる

風塵18年　風の始代祖死去。始代祖の死期が迫ると照葉が魅了者を生むことが分かる。

風塵20年　新たな風の始代祖の発見。拘束。

風塵21年　風の始代祖の実験中、事故が発生。研究機関員全員が砂となる。

風塵22年　風の始代祖を拘束、地下に隔離。隔離場所の地上の時間が急速に進み始め、作物の供給が確保される。

風塵23年　コイネヴィア大陸北西に、大陸の分のほどの大国イーストラザが建国される。風の始代祖を移送し、イーストラザの地下に投獄。巨大な食料供給産業を築き上げる。これらの技術を風機関と命名。

風塵26年　生物工芸技術の発展。食料の幅を広げるためクロレラの培養が開始される。

風塵27年　政府は人と異なる生物の研究を開始。風説に記される狼と人のハイブリッドを創造しようとしたが、細胞の変態が起こらず失敗。

風塵44年　クロレラのたんばく質から動物性たんばく質の生成に成功。食肉の製造に向けて研究が重ねられる。

風塵46年　全国各地で嘔吐・下痢・高熱の症状を引き起こす病気が蔓延する。

風塵49年　嘔吐・下痢・高熱の患者から新たな種が発見され、ウイルスと命名される。また、クロレラの食肉製造技術が完成し、配給が開始される。これにより、草食文化が雑食文化へと移行する。

風塵53年　再び全国各地で嘔吐・下痢・高熱の症状を引き起こす病気が蔓延。従来のウイルスとは性質の異なる新たな種であったため、風説の「自身を知る」ことのなかった生物が自身を知り始めたとする仮説が出された。新たな種には細胞壁があったためウイルスと差別化するために菌と命名された。

風塵58年　クロレラ培養施設で新たなウイルスを検出。感染したクロレラ生成食肉の変化を確認。ウイルスによる動物細胞の遺伝子組み換えの研究が開始される。

風塵59年　ウイルスによる遺伝子組み換えが植物にのみ成功。しかし、マメ科の植物を同マメ科の別品種に改良するものであり、新たな品種の生成には至っていない。

風塵79年　ウイルスによる動物細胞遺伝子の組み換えに新たな進展。ウイルスの遺伝子制御に成功。

風塵122年　風機関に壁面の劣化、地下の崩落が確認される。全国各地に風の魅了者が生まれる。魅了者全員を拘束。

風塵123年　風機関の壁面の崩壊が確認される。北東の郡野の森林北が異常に進行。偵察隊員によって地下空間が確認される。風の始代祖の風によって施設の壁面にヒビが入り、そこから風が漏れたことで地下が風化し柔らかい地層が劣化したことによる空洞化だと解析される。

風塵125年　風機関の隔離施設の時空が閉鎖される。しかし、風の漏れが大きい作業員が風化し弱に変わることから、作業員の風説蔓延が起こり、やむなく供養命年が出されることとなる。

風塵126年　風機関の崩壊。大きな爆発と共にコイネヴィアの北半分が同時に砂漠となる。その影響により、東の山脈に流って大陸を切断するように溝帯ができる。風の始代祖の消息がわからなくなる。イーストラザ周辺の核武装放射線の影響により、民間人の立ち入りが制限される。

風塵128年　イーストラザの中心に老人が倒れているのを発見・救出。風の始代祖のとは思われたが、別人と確認。意識不明。

風塵132年　拘束していた風の魅了者を使ったウイルス制御の人体実験が始まる。老人が意識を取り戻す。

プロローグ

プロローグ

朝焼けが大地にぬくもりを与える頃、ウブメはウェストリアから大陸の中心であるメファトエリオソへ旅にでた。

彼女は、ウェストリアから大陸を縦断する「スキラの地鉄道」の風磁気新快速列車「アクタトロス号」に指定席をとっていたのだが、砂嵐によって小一時間程の遅れが発生したため、始発駅「カンファルト駅」のベンチに座って膨らんだお腹をさすって身体をゆりかごのようにゆっくりと小刻みに揺らしていた。

「何も今日、砂嵐起こらなくてもいいのにねえ。早く会いたいねえ。」

誰かに話しかけるように優しく語りかける。

「あ～、また蹴ったあ。」子供のように甘い声で言ったあと、ふふっと頬を緩めて、大きなお腹に視線を落とす。「早くパパにあいたいでちゅねえ。」

(どんな子が生まれてくるんだろうな。私似かな？それともヴァントレイさん似かしら。男の子？女の子？早く生まれておいで。い～っぱい甘えていいんだよ。お母さん、い～っぱい大好きだよ。)

そんなことを考えながら微笑みかける。

「ま～だかな？ま～だかな？」

小声で口ずさみながら、左右にリズムをとっているとアナウンスが鳴った。

「あ、来たよお。来ちゃったよ～。」

ウブメは大きなお腹に手を据えて抱きかかえるようにしながら、「よいしょ」と立ち上がり、ホームへ向かった。

スキラの地鉄道はメファトエリオソまで伸びていない。それは砂漠の中心から500km程しか離れていないからだ。

メファトエリオソにはイーストラザの風爆の影響で民間人は立ちいることができないため、一番近いツペントリア駅へ向かっている。そこで夫であるヴァントレイを迎えるためだ。

ヴァントレイはイーストラザで起きた事故の調査のため、新都ウェストリアから派遣されて数週間調査と研究を行っている。国の基準量風曝しないために数週間毎に二週間の長期休暇が与えられていて、今日が休暇の初日だ。

除染作業のため最終日の夕方から朝方までは帰宅が許されないため、毎回初日にずれ込む形になる。その度、風曝の恐怖と家族に対する不安で心が一杯になるが、毎度ウブメがツペントリアまで迎えに来てくれるのでいつも助けられていた。

「ウブメのお腹、どれくらい大きくなっただろう。今月が臨月だったはずだよな。無理してなきゃいいけど。」

ヴァントレイはメファトエリオソの防壁の入り口で狼の毛皮でできた防護服を脱ぎ、ツペントリア行の貨物列車に乗り込んだ。

このとき、大陸の運命を変えることになる狼の群れがこちらに向かっていたのだが、二人はそのことに気がついていなかった。

大陸北西に広がる巨大な砂漠には幾種の狼の群れがそれぞれテリトリーを持って争っていた。その地にはイーストラザの残留放射風が残っており、メファトエリオソ程では無いが、人肌では二日も経たないうちに風化して砂になってしまう。

ただし、狼は違っていた。狼の血には遥か昔の銀狼の血が流れているからだ。

銀狼はイーストラザの風爆以来、住処を失い、砂漠を彷徨っていた。多くが死に、他の狼の糧となった。一定の犠牲が払われたのち、進化という慈悲を与えられ銀狼の新たな一歩が踏み出された。

種は日光による日焼けで銀色の毛皮を失い、代わりに褐色の毛を齎された。そして現代狼は銀狼よりも日光に強く水の代謝が効率的で、数日飲まず食わずでも生き残れるようになった。

一つ一つの進化にはそれぞれ一定の犠牲があった。

そして、現代。

狼たちは大きく分けて六つのテリトリーに別れ広大な砂漠の、イーストラザの廃墟を拠点に生活していた。

そのうち二つが、ロッカの群れとシェバンナの群れである。

ロッカの群れはアルファのロッカを含め16頭の比較的頭数の多い群れだ。

アルファのロッカと伴侶のクース、それから子守役にメスが六頭と監視役に雌雄合わせて七頭、そしてオメガに、ロッカの兄であるフィズがいる。

一方シェバンナの群れは七頭の比較的普通の群れである。

アルファのシェバンナと伴侶のクィナ、子守役に雌雄二頭と監視役にオス一頭、そしてオメガにメスのフィオナがいる。

アルファとは群れのリーダーの階級であり、オメガとは所謂ストレス解消道具である。

各群れには必ずオメガがいる。オメガがいることで、群れの中で闘争が起こらないのだ。しかし、どんなにストレスを抱えていようと、皆血が出る程手を出したりしない。それは、オメガの存在と役割を理解し、群れの一員として認めているからである。

オメガがいなくなると他の誰かがオメガ役を引き受けなければならなくなる。それが自分自身である可能性もあるわけだ。

また、オメガも一匹狼がどれほどのものか理解している。群れにいれば、どんなに獲物が少なからうと死なない程度には恵みを分けてもらえる。それが狼たちの階級制度なのだ。

さて、フィオナはもともと、ロッカの群れのオメガだったのだが、一匹狼の道を選んだのち、飢えて死にかけているところをシェバンナに拾われた。

一匹狼はテリトリー外地を彷徨いながら、自立した群れを作ろうとする。そのさなかに命を落とす者は数しれない。

フィオナが出て行ったあと、ロッカの群れでは階級闘争が起こり、フィズは力のある狼だったが何分大人しい性格であったため、結果オメガを引き受けることになってしまった。

その後数ヶ月後の繁殖期、各群れで行為を求めて階級闘争が起こっていた。

オメガであるフィズは闘争から抜け出し、テリトリー外地を歩いて気を晴らしていた。

「俺は一体どうしたらいい。誰も傷つけないが、子供は残したい。階級なんて馬鹿らしいじゃないか。皆平等に繁殖すればいいのに。」

フィズは不満を漏らしながら砂地を踏みしめ、たまに落ちていいる干からびたミミズを啄むようにして口に含む。

(そうだよな。草食動物も減って来たし、こんなマズイ風化しかかったミミズを食べないと生きていけないんだから、みんなで繁殖しちゃったらご飯が足りなくなるよね。)

ため息を漏らしながら足を止め、ぽりぽりとミミズを噛み砕き吐きそうになりながら唾液と共に飲み込み、ため息をつく。「まっずいな・・・。」

口の中に残るミミズの味に身震いしながら、周囲を見渡すと、見渡す限りの砂の大地であった。

砂の向こうに森が見えることもあったが、それは蜃気楼だと教わって育って来た。

「母さんは森を見たことがあったのかな。」人間に狩られ死んでしまった、僅かに残る母親の記憶。身体に微かに残る当時の臭い。「蜃気楼ってどんな物なんだろう。見てみたいな。人間の建物なのかな。」幼い頃ロッカと共に母親のお腹の毛に包まれながら巣穴で昼寝をしている記憶が蘇る。

「人間はとても優れた生き物なのよ。でも、彼らに近づいてはだめ。」母は前足で双子を抱きしめ、額を優しく舐める。「人間は、もし友好的な狼が近づいても物のように簡単に壊してしまうわ。」

「どうして？」ロッカが母親を見上げる。

「私たちは食べるために動物を獲るわよね。」双子は相槌を打つ。「人間たちは食べるためじゃないのよ。私たちの毛皮を履いで自分たちの毛皮にするの。」

「人間は狼になりたいの？」今度はフィズが口を開く。

「いいえ。人間は毛皮を持ってないから、寒い時期になると凍えてしまうの。だから、狼の暖かい毛皮を欲しがるとよ。」

「お母さんあったかい。」ロッカが母親のお腹に頬ずりし、フィズも負けじと甘える。

「あらあら。」母親は優しく微笑んで双子をふわふわと撫でた。

母親が生きていたら、そう思うと、フィズはとてもさみしい気持ちになった。

気がついた時には、陽が落ちかけて空が綺麗なオレンジ色に輝いていた。

(そろそろ帰らないと、みんなが心配するな。)

フィズが群れのテリトリーへ帰ろうと向きを変えた時、聞き覚えのある声で自分を呼んだ気がした。振り返ると、そこにはメスの狼が立っていた。

「やっぱりフィズじゃん!」

先に声を上げたのはメスの方であった。

「もしかして、フィオナ？」フィズは驚いた。「まだ一匹狼を続けてたんだね。」

「違うよ。今はシェバンナの群れでオメガやってるの。」フィオナはニコニコして歩み寄るとフィズにもたれかかる。「フィズこそ、ここで何やってるの？もしかして一匹狼になったの？」

「いや、みんな行為のために階級闘争してるから出て来たんだ。」フィズもフィオナの首に顎を重ねる。「元気そうで良かったよ。」

「別の群れだから、今すぐにでも噛み付いちゃうかもよ。」フィオナはフィズが群れを出てないことを知ると少しガッカリしたが、フィズの行動に従って頭を下げ目を閉じた。「あなたがアルファになってくれたら、私も出ていかなかったのに。」

「フィオナが噛み付いたって僕は逃げたりしないさ。」フィズは顎を載せたまま、フィオナの顔に沿って滑らせ、柔らかい胸毛がフィオナの頬を撫でる。「フィオナとはずっと一緒にいたか

った。」

フィオナはふふっと笑って額をフィズの肩に当てると、そのまま顔を上げて耳元で囁いた。

「二人で、群れをつくらない？」

フィズは驚いてフィオナの顔を見た。フィズの知っているフィオナはどちらかというとおっとり目の性格で、いつもだらしの無い姿をしていたし、群れを出る時も何も言わずにのそのそと出て行った。そのフィオナが新しい群れを作るなどという突拍子もない提案をフィズに持ちかけている。

「フィオナは変わってしまったね。」残念そうに、しかし心からの祝福をもってそう言った。

「あなたも変わったわよ。オメガの役に当てられると、そういうふうになっちゃうのよ。私が、変わることができたのもロッカから開放されたからなの。」フィオナは申し訳なさそうにフィズをチラリと見ると、目が合わないうちに正面を向いた。「ロッカは横暴よ。長年アルファの役に立って、役に当てられてしまった。年々私の貰えるお恵みは減らされていったわ。フィズが自分の分を分けてくれていたから、何とか生きてこられてた。」

「あの当時は本当に醜い姿だったよね。毛皮がペチャンコで皮脂だらけだったし、毛が抜け落ちた部分もあったよ。」

フィオナはじとっとフィズをみた。

「今思えば、よく死ななかつたものよね。」そして、ハアと溜息をついてフィズにもたれかかりながら言った。「でも今は幸せよ。毎日お腹いっぱい食べることができるわ。オメガだというのに、皆優しくしてくれるの。」

「じゃあ、なぜ俺と群れを作ろうなんて思ったんだ？」

「私はシェバンナより、フィズと一緒にいたいだよ。フィズだって同じでしょ？実はね、これを言うために毎日ここを歩き回ってたんだ。みんなには内緒だけどね。」

フィズは無言で頷いた。だが、心の中では群れを出ることと群れを作ることの葛藤があった。それがつかえとなり暫し沈黙の時間があつた。

そのあと、一面が薄暗くなった砂漠で二頭は愛を交わし別れた。

フィズは全身に愛を感じながら、フィオナは下腹に残る余韻に浸りながら群れへと帰った。

これがフィズを選ぶ道の一つに絞ることになった。群れをでなければならぬという道だ。

次の砂嵐がきた時、二人は新たな群れを作ることを誓い、お互いのアルファに感づかれぬよう、このあと数ヶ月の間会うことも無かつた。

そして、季節の変わり目に砂嵐がやってきた。

ロッカに群れを抜けることを告げると、最初は驚いた様子だったが、フィズが実の兄であることに免じて許してくれた。

「ただし、もし次に会うことがあつたらお互い別の群れ同士、敵だからな。」最後にロッカはこう付け加えた。

縁を切ることほど心にこたえるものはない。今まで仲間であつた彼らと、赤の他人を通り越して敵同士になる。どちらかがどちらかを殺してしまう可能性もあるのだ。

身支度など無いので、そのまま背を向けて群れを出る。今まで狩をしてきた砂地、細々と生える草花、獲物の残骸、その全てが通り過ぎる背中を擦って行く。仲間と共に走った地と、その情景が心の中で反芻される。

「さよなら。どうかみんなを守ってやってください。」